



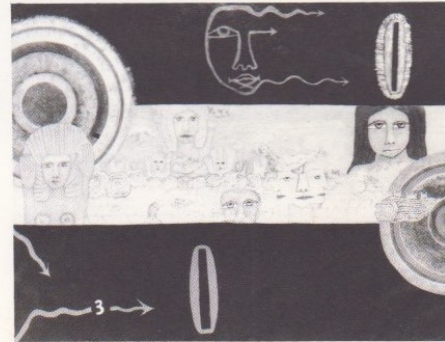
霧の中の世界 F100 1974 ~ 75



行きましょう行きましょう F30 1973 ~ 76



霧と霧との関係 F100 1975 ~ 78



こちらの向う側 F30 1974 ~ 76

りとわかるように示してみようという意図があったに違いない。その意味で、私は、国際市場価値を獲得し始めている事実を、少しばかり付け加えておこう。

パリに本拠をおくランベール画廊は、日本の画家五人と契約している。前田常作、渡辺恂三、平賀敬、テラカドアキラ、そして桜井孝身である。

この契約は、パリ画壇が国際市場に責任を持って送り出す作品の力の具体的証明といってよい。

また桜井は、アメリカでは、ニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコ、ラグナビーチにネットワークを持つポーパル画廊とも同じような契約を結んでいる。この画廊から最近、桜井の許に送られてきた売買成立の通知を見せてもらったが、桜井孝身はもはや力強い現実性をもって国際社会に足を踏み出しているのである。

画廊との契約まで触れることが、彼の絵を推奨する気持の出過ぎといわれるなら、私はあえてその非難を甘受する。一個の画家の表現力の大きさを語ればそれでよいとは思うものの、なお多くの人々に彼の絵の魅力に触れてもらいたいための、ささやかな説明だから。

桜井孝身は、九州が、福岡が自分の根拠だと繰り返し述べる。そして、その通りであろう。それだけに、私たちが存在の大きい画家をすぐ身近に持っていることを、彼の作品に即して語り合いたい。はるかに思うゴッガンが生存中に正当な理解を得ることなく、南海の孤島で窮死した哀しみを、われわれの誤ちとしないためにも。